

学会だより

第106回 日本消化器病学会総会

持田 智

(埼玉医科大学消化器内科・肝臓内科)

第106回日本消化器病学会総会は、茶山一彰先生(広島大学大学院医系科学研究科消化器・代謝内科学)が会長で、2020年4月23～25日の日程で、広島で開催される予定であった。テーマは「消化器病学の明日を拓く」である。しかし、COVID-19の蔓延で、会期は同年8月11～13日に延期となったが、第2波が収まらないため、完全Web配信となった。理事長講演、会長講演、特別講演、招請講演、学術賞受賞講演、臨床研究助成発表と10のシンポジウムが収録され、オンデマンドで8月11～31日に視聴できるよう配信された。

会長講演のタイトルは「肝臓に関する研究のこれまでとこれから」で、茶山会長が虎の門病院に在籍した1986～2000年までの肝炎ウイルスに関する研究から、その後、現在のポジションで展開している肝炎ウイルス、肝発癌などに関する最先端の研究までを、ご紹介いただいた。臨床医の視点で、基礎的研究の成果を多数達成した先生のご講演は、若い消化器病専門医、研究者を大いに力づけたと考える。招請講演では熊田博光先生(虎の門病院肝臓内科)が「虎の門病院で培われた臨床医としての生き方：肝炎治療と向き合って48年」を語られ、茶山会長の膨大なお仕事のパックボーンが示された。また、特別講演では、理化学研究所の藤井眞一郎先生が「癌免疫ネットワークと免疫療法の最先端」、東京大学医科学研究所の柴田龍弘先生が「癌ゲノム解析の将来展望」に関する最新の情報を発信された。いずれも茶山会長の研究にも関連する内容で、テーマに沿った消化器病学の研究の「明日を拓く」ご講演であった。また、理事長講演では、小池和彦先生(東京大学消化器内科)が「迷走する専門医制度と消化器病学会」を概説された。新専門医制度の中で、サブスペシャリティ領域の位置付けは混沌としており、若手会員の不安を拭う効果があったと考える。招請講演では、畠山昌則先生(東京大学微

生物学病因・病理学専攻)が「ピロリ菌によるHit-and-Run 胃癌発がん機構」、前理事長である下瀬川徹先生(みやぎ県南中核病院)が「自己免疫性膵炎：新たな展開」に関して解説され、当該分野の専門家以外にも興味を抱かせる内容であった。

シンポジウムは特別講演、招請講演に関連したテーマが選ばれていた。「消化器癌に対する免疫療法の現状と展望」、「消化器癌化学療法における個別化医療の現状と課題」、「B型肝炎治療の進歩と現時点での問題点」、「ヘリコバクター・ピロリ除菌後の胃癌の本質に迫る」など、特別講演、招請講演と併せて視聴することが推奨される。また、再生医療、バイオマーカー、トランスレーショナルリサーチ、肝癌薬物療法、消化器がん検診、肝門部胆管癌など、最近、注目されているテーマもシンポジウムに取り上げられた。しかし、残念なのはパネルディスカッションとワークショップが誌上発表のみになったことである。12のパネルディスカッションは、いずれもコンセンサスを得るために総合討論が必要となるテーマであり、全体をまとめる司会の手腕がおおいに期待された。また、15のワークショップは最先端の研究結果の発表の場で、抄録を越えた詳細を確認したくなる演題が多かった。これらと、709の一般演題(口演：181、ポスター：528)を視聴できなかったのは残念である。スポンサードセミナー、附置研究会、メディカルスタッフ特別企画、ポストグラデュエイトコースも中止になった。

COVID-19蔓延の影響は多大であった。この未曾有の状態で、開催に至るまでの茶山会長と教室の皆さんのご尽力は、大変なものであったと推察する。今後、通常開催が可能になった際も、3密を避けることは必要であろう。その際に、最初にご苦労された茶山会長のご努力は、後に続くわれわれの指標になると考える。